

最近の日本語主題文の分析をめぐって*

許斐慧二

0. 序

日本語の主題文の取り扱いについては従来二つの異なる立場があった。一つは、主題文の派生は移動を含むとする立場であり、いま一つは主題句は基底部に於いて直接その表層の位置に生成されなければならないとする立場である。しかし、そのいずれが正しいのか（あるいは主題文の派生を適切に説明するには両方とも必要であるのか）について統語論的な観点から十分な検討はなされていなかったように思われる。ところが、最近になって、GB理論による日本語の研究に於いて、日本語にも統語的な移動が存在するのか、あるいは、日本語の構造も binary であるのか、といった問題が注目を集めるようになり、それとの関連で主題文の派生の問題が再び活発に論じられるようになって来ている。

本稿では、そうした最近の日本語主題文の分析の中から Saito (1985, 1987), Hoji (1985), Kuroda (1987) の三つを取り上げて、その派生の問題がどのように取り扱われているかを見てみる。そして、これらの分析も依然として経験的に満足のゆく解決法とはなっていないことを指摘したいと思う。

1. 最近の分析

まず初めに日本語主題文の先駆的な変形理論的研究で、その生成・派生に関して相異なる見解を示した二つの分析を簡単に見ておきたい。

Kuroda (1965) は日本語の主題文を生成するのに次の一組の句構造規則を提案している。

(1) a. 文 → 文-は

b. 「は」-付与:

[X-名詞句-Y]-は → [X-名詞句+は-Y]-は

c. 「は」-消去:

[X-名詞句+は-Y]-は → [X-名詞句+は-Y]

d. 「し」-挿入

動詞-助動詞-は → 動詞-は-し-助動詞

e. 「は」-句倒置

X-名詞句+は → ##名詞句+は-X, 但し, Xは「X'-名詞句+は」でない。

(1)の規則の適用によって、例えば、目的語の名詞句が文頭に生じている、

(2) bのような文は概略(3)の過程を経て派生される。

(2) a. ジョンはあの本を買った。

b. あの本はジョンが買った。

(3) a. [s ジョン+が-あの本-買った]-は

↓ 「は」-付与

b. [s ジョン+が-あの本+は-買った]-は

↓ 「は」-消去

c. [s ジョン+が-あの本+は-買った]

↓ 「は」-句倒置

d. [s あの本+は-ジョン+が-買った]

注意すべきは(3) c の中間構造から表層構造の(3) d を派生するのに適用されている「は」-句倒置なる規則が移動規則であることである。

これに対して、Kuno (1973) 及び久野 (1973) は主題の名詞句は文頭の位置に

基底部で直接生成されなければならないと主張する。久野の挙げている根拠は二つある。第一に、(4)に見られるように、主題文のコメントの部分に、代名詞、再帰代名詞が現れることがある。

- (4) a. 太郎は、彼が書いた本がベストセラーになっている。
 b. 太郎は、自分が師事していた先生が死んでしまった。

第二に、無題文に書き換えることのできない主題文が存在する。

- (5) a. 魚は鯛がいい。
 b. あれは、絶対に、アメリカが悪い。
 c. 新聞を読みたい人は、ここにいます。
 d. 場所は屋内説が圧倒的だった。

そこで、久野は(6)のような句構造規則で主題文を生成することを提案している。

- (6) a. 文 → 主題+文
 b. 主題 → 名詞句+は

この分析に従うと、例えば、(2) b の基底構造は概略(7)のように表わすことができる。

- (7) [s [THEME [NP あの本は]] [s ジョンが買った]]

では、次に最近の研究がどのように主題文の派生を取り扱っているかを見よう。

Saito 説

Saito (1985, 1987) は、(i) Kuno (1973) 及び久野 (1973) の指摘するように主題句は文頭の位置に直接生成されるが、同時に、(ii) Kuroda (1965) によって提案されているように文頭の位置への移動によっても派生されると主張する。

(i)の証拠として(5) a や(4)の文に見られるように主題句が項の位置を束縛する必要がないことや再述代名詞の生起が許されることの他に、(8)に見られるように主題化が下接の条件に従わないことを挙げている。

- (8) a. その少年_iは [[e_i e_j可愛がっていた] 犬_j] が死んでしまった。
 b. その紳士_iは [[e_i e_j着ている] 洋服_j] が汚れている。

(ii)の証拠としては(9) c, (10) cに見られるように後置詞句の主題化が下接の条件に従い、かつ、再述代名詞の生起を許さないことを挙げている。

- (9) a. ??北京_iはジョンが [[e_i行ったことがある] 人] を見つけたらしい。
 b. ?*北京_iに_iジョンが [[t_i行ったことがある] 人] を見つけたらしい。
 c. *北京_iには_iジョンが [[e_i行ったことがある] 人] を見つけたらしい。
 (10) a. ?ラッセル_iはジョンが [彼_iに会ったことがある人] を大勢知っているらしい。
 b. *ラッセル_iに_iジョンが [彼_iに会ったことがある人] を大勢知っているらしい。
 c. *ラッセル_iには_iジョンが [彼_iに会ったことがある人] を大勢知っているらしい。

(9) b, (10) bから分かるようにこれは移動の一種であるかき混ぜに見られるのと全く同じ現象であり、後置詞句の主題化はかき混ぜの一例と見なすことができる。

しかし、もし後置詞句の主題文の派生がかき混ぜによるのであれば、名詞句に「は」の付与された主題文も同様に派生されてよいはずである。かくして、Saitoの分析では(2) bのような文は2通りの派生を有することになる。例え

ば、(2) b は(11)のように(6)の規則によって直接生成されるが、同時に、(12) a にかき混ぜを適用することによっても派生される。

(11) [_s あの本_iは [_s ジョンが e_i 買った]]

(12) a. [_s ジョンがあの本は買った]

↓ かき混ぜ

b. [_s あの本_iは [_s ジョンが t_i 買った]]

Hoji 説

Hoji (1985) は Saito (1985, 1987) が仮定した、(2) b のタイプの主題文の 2 つの異なる派生は「は」の意味・用法の違いに対応すると主張している。

Hoji によると、文頭の名詞句に含まれる空代名詞が主語の数量詞句に束縛された変項の解釈を受けることができるかどうか、あるいは、照応形の「自分」が主語の数量詞句を先行詞にとることができるかどうかを調べることによって実際にその文頭の名詞句が移動によって派生されたものかどうかを明らかにすることができるのとことである。

次の構造を見てみよう。

(13) a. [... e.....]-は 数量詞句-が 動詞

b. [... 自分....]-は 名詞句-が 動詞

もし文頭の名詞句が動詞の直前の位置から主語の名詞句を越えて前置されたのであれば、(13) a の空代名詞 e は数量詞句に束縛された変項の読みを持つことができ、また、(13) b の「自分」は主語の名詞句を先行詞とする読みを持つことができることが予測される。そうでなければ、(13) a では、いわゆる弱交差効果が生じ、一方、(13) b では、「自分」が先行詞に c-統御されず、これらの構造は容認されないことになる。

次の文を見てみよう。Hoji によると(14)に於いて「は」が主題を表わすと解釈される場合には関係節中の空代名詞と主語の数量詞句との間に変項束縛関

係が成立しない。

(14) * [NP [s e_i その店で一目 e_j 見た] 人_j は] 誰もが_i 好きになった。

(14') [NP [s e_i その店で一目 e_j 見た] 人_j を] 誰もが_i 好きになった。

もし関係節を含む主題の名詞句が主語を越えて前置されたのであれば、移動によって派生された(14')と同様に(14)の例文に於いても当然 e_i と主語の数量詞句との間に変項束縛関係が成立するはずである。(14)が非文であることは文頭の「名詞句-は」が前置されたものでないことを示している。

Hoji は、更に、照応形束縛に関する事実も文頭の主題句が主語の名詞句を越えて移動したものでないことを示すと主張する。(15), (16)をそれぞれ(15'), (16')と比較されたい。

(15) * [その自分_i についての本] はジョン_i が捨てた。

(15') [その自分_i についての本] をジョン_i が捨てた。

(16) * [メアリーが自分_i にくれた本] はジョン_i が捨てた。

(16') [メアリーが自分_i にくれた本] をジョン_i が捨てた。

Hoji によると(15')と(16')が容認可能なのはこれらの文の派生に於いて目的語の名詞句がかき混ぜによって主語の名詞句を越えて文頭に移動されているからである。一方、(15), (16)は非文であるが、もしこれらの文の派生に於いて文頭の名詞句が動詞の直前の位置からその表層の位置に移動されたのであれば、当然これらの文も(15'), (16')と同じように文法的であるはずである。(15), (16)の非文法性は主題を表わす「は」の付与された名詞句が文頭の位置に移動されたものでないことを示している。

ところで、Saito が(2) b のような主題文が移動によっても派生され得ると考えたのは後置詞句の主題化がかき混ぜによると考えられるからであった。Hoji は後置詞句に付与された「は」が対比の読みを持ち、それが文頭に移動されることに着目する。そして、(14), (15), (16)も「は」を強調して対比の読みを持たせれば、容認可能になるとの彼自身の観察に基づいて、対比の

「は」の付与された名詞句はその表層の位置に移動されたものであると主張する。

かくして、Hoji の分析では主題文（ここでは主題の「は」-句を含む文を指すが、本稿では混乱の生じる恐れのない限り主題と対比の区別なく「は」-句を含む文をこう呼ぶ）と対比文は(17) a, (17) b のように生成・派生される。(18) a, (18) b はそれぞれの S-構造を示している。

(17) a. 主題を表わす「は」-句は S' の下に基底部生成される。

b. 対比を表わす「は」-句は S の下に基底部生成され、Move α の適用を受ける。

(18) a. 主題文の S-構造：

[_{S'} 名詞句_i -は [_{S'} [_S 名詞句-が [_{UP} e_i 動詞]]]]

b. 対比文の S-構造：

[_S 名詞句_i -は [_S 名詞句-が [_{UP} t_i 動詞]]]

Kuroda (1987) 説

これまで提案された殆どすべての主題文の分析は、(5)a のような主題文の派生では主題句の文頭部での直接生成を想定していたが、Kuroda (1987) は正しく主題文と呼べるものの派生はすべて移動によるとし、Kuroda (1965) の分析が基本的には正しいものであることを改めて主張している。

Kuroda はこれまで主題文として扱われてきたものには3つのタイプがあることを指摘する。(i) 「は」-句が空所（項のこともあれば付加句の痕跡のこともある）を束縛するタイプ。(2)などがこれに属す。(ii) 「は」-句が空所を束縛しないか、あるいは、束縛しないように見えるが、「が」-句と交替可能であるタイプ。これには「象は鼻が長い」式の主題文が該当する。例えば、(19)、(20)の「は」は(21)、(22)から分かるように「が」と交替可能である。

(19) 孔雀は雄の方がきれいだ。

(20) 日本は心理学者が来た。

(21) 孔雀が雄の方がきれいだ。

(22) 日本が心理学者が来た。

(5) a の「魚は鯛がいい」は「は」を「が」に置き換えると容認可能度が落ちるが、Kuroda によるとこれは意味的な理由によるものに過ぎない。(iii) 「は」-句が空所を束縛せず、しかも、「は」が「が」と交替しないタイプ。久野氏が直接生成説の根拠として挙げた例文のうち、(5) a を除いたもの(出典は三上章に負っている)がこれに属す。

Kuroda はこのうち(i)と(ii)だけが真に主題と呼ぶことのできるものであって(iii)は主題ではないと主張する。(iii)のタイプの「Xは」は「Xが」に置き換えることができないし、また、このタイプの文からは対応する関係節文が派生できない。

(i)のタイプの主題文では、束縛された空所をもつ主題句は「が」と交替できない。例えば、(23)を参照。

- (23) a. 正夫が英語を話す。
 b. 正夫は英語を話す。
 c. 英語は正夫が話す。
 d. *英語が正夫が話す。

また、そうした主題句は内在格 (inherent case) を取り得る。即ち、二重格付与と呼ばれる現象が観察される。

- (24) a. 日本からは心理学者がその会に来た。
 b. *日本からが心理学者がその会に来た。
 c. 心理学者が日本からその会に来た。

こうした事実は問題の主題句が移動によって派生されたものであることを示している。ちなみに、Kuroda によると、この移動の着地点 (landing site) は格助詞が付与されない位置、即ち、S の外で S' に直接支配された位置でなければ

ならない。Kuroda の分析では後で見ると多重主語文（「XがYが…」のタイプの文）の大主語である「が」-句が通常の格付与の規則によって格を獲得すると仮定されており、主題句移動の着地点がSに直接支配された位置であったならば、移動が格付与の後に適用されるように規則の適用順序を規定しなくては(23) dや(24) bのような非文を排除することができないからである。(23) b, (23) c, (24) aのS-構造はそれぞれ(25), (26), (27)である。

(25) [s' 正夫は [s [e] 英語を話す]]

(26) [s' 英語は [s 正夫が [e] 話す]]

(27) [s' 日本からは [s 心理学者が [e] その会に来た]]

一方, (ii)のタイプに属す, 空所を束縛しないように見える「は」-句は前述のように「が」句との交替が可能である。Kurodaはこの事実はこの「は」-句が格付与の規則によって「が」を付与される統語的な位置に起源を有することを示していると考え, このタイプの主題文は次のような構造を含んでいると仮定する。この構造に於いてSに直接支配された名詞句は格付与規則の適用を受ける。

(28) [s 名詞句 [s]]

では, Kuroda (1987) の分析で, (ii)のタイプの主題文がどのように派生されるかを具体的に見てみよう。もう一度, (21), (22)の文を見てみよう。これらの文は(29), (30)に示された構造を有すと考えられる。

(29) [s 孔雀 [s 雄の方きれいだ]]

(30) [s 日本 [s 心理学者来た]]

格付与規則が(29)と(30)に於いて第一と第二のサイクルで適用されると(31), (32)がそれぞれ派生される。

(31) [s 孔雀が [s 雄の方がきれいだ]]

(32) [S 日本が [S 心理学者が来た]]

更に、主題となる名詞句が S' に直接支配された位置に移動されると (19), (20) が派生される。(33), (34) はそれぞれ (19), (20) の S-構造を示す。

(33) [S' 孔雀は [S [NP^e] [S 雄の方がきれいだ]]]

(34) [S' 日本は [S [NP^e] [S 心理学者が来た]]]

このように、Kuroda (1987) の分析ではその表層の位置に基底部で直接生成される主題句は存在せず、主題句はすべて項か付加詞の位置に生成され、A'-位置、即ち S に支配されず S' に直接支配された位置に移動される。

以上見てきた 3 つの主題文の分析を要約すれば次のようになる。

[1] Saito 説：「名詞句-は」は文頭に基底部で直接生成される場合と、文中の位置から文頭に移動される場合と 2 つの派生の可能性がある。一方、「後置詞句-は」の派生は移動（かき混ぜ）による。

[2] Hoji 説：主題を表わす「は」-句は基底部で直接生成され、対比を表わす「は」-句は、「は」が付与される句が名詞句の場合であれ後置詞句の場合であれ、移動によって派生される。

[3] Kuroda 説：主題文（主題と対比の区別はない）はすべて移動によって派生される。「象は鼻が長い」の類の文は対応する多重主語文（「象が鼻が長い」）の基底形から主題句が大主語の位置から S' に直接支配された位置に移動されて派生される。

2. 問題点

本節では前節で概観した主題文の分析の問題点について論じる。

- (I) 本当に本来の主題句（即ち、主題を表わす「は」-句）の派生には移動が含まれないのか。

前節で見たように Saito (1985, 1987) も Kuroda (1987) も (2) b のような文の

派生には移動が関与していると考えている。それに対して Hoji (1985) は「は」-句が主題の読みを持つ場合には関係節中の空代名詞が「誰もが」に束縛された変項として解釈されないとの判断に基づいて、目的語の働きをしている文頭の、主題を表わす「は」-句は移動によってその位置に生じているのではないと主張している。しかし、果たしてそうであろうか。次の文を見てみよう。

- (35) [NP [s e_i その会場で初めて e_j 会った] 人_j] からは誰も_i がよい印象を受けた。
- (36) [NP [s e_i その時 e_j すれ違った] 人_j] には誰も_i が気づかなかった。

これらの文では、関係節中の空代名詞と数量詞句との間に変項束縛の関係が成立している。

(14)の文と(35)、(36)を比較してすぐ気づくのは前者では「は」が付与されているのが内在格を伴わない名詞句であるのに対し後者ではそれを伴った後置詞句であるということである。私見では、(14)の文が容認されにくいのは、この文では「は」-句が目的語の解釈を受けにくいからであると思われる。「は」が直接に名詞句に付与されている場合には後出の動詞に対して主語にも目的語にも解釈される可能性があり、意味的・文脈的な要因によってどちらか一方の解釈に決まることが多い。(14)の「Xは誰もが……」のように、「X」が人間を表わし、その後に「誰もが」が続くと、どうしても「Xは」は主語と意味的に結び付いた主題句と解釈されやすい。次の文がこの辺りの事情をよく示している。

- (37) その会場にはすごい美人がいた。一目見た人は誰もが好きになった。

一方、(14')や(35)、(36)が容認されやすいのは(14')では格助詞「を」によって、(35)、(36)では「は」に先行する内在格によって、それぞれ、主題句と後続部分との文法関係・意味関係が容易に推測されるからである。

しかし、文頭に生じた「名詞句-は」が目的語の解釈を受けられないという

わけではない。次の例文を見てみよう。

- (38) [NP [s e_i その時会場で e_j 会った] 人_j] の名前／ことは誰も_i がよく覚えていた。
- (39) [NP [s e_i 若い頃 e_j 書いた] 論文_j] は誰も_i が公表しながら
ない。
- (40) [NP [s e_i e_j 喧嘩／口論した] 相手_j] は誰も_i がよく記憶して
いる。

(38), (39)では「は」が「人間」を意味しない名詞句に付いている。したがって、これらの文の「は」-句は「誰もか」と続いても主語に関連した主題句と解釈され難い。また、(40)では「は」が「人間」を表わす名詞句に付いているが、この名詞句は意味的に目的語の解釈を受けやすい。これが(38)－(40)が容認可能である理由であろうと思われる。

次に、照応形束縛の例をもう一度検討してみよう。Hojiは(15), (16)の文で「自分」が「ジョン」を指示する照応形としての解釈を受けられないことから、主題句が主語の名詞句を越えて移動したものではないと考えているわけであるが、これにも問題があるように思われる。例えば、次の例文を見てみよう。

- (41) その [s 自分_i のことが書かれている] 本はジョン_i が自ら指定図書に推薦した。
- (42) [s 自分_i の提案を取り挙げて称賛してくれた] その新聞記事はジョン_i が研究室の壁に貼った。
- (43) (子供の目に触れるといけないので) [s 自分_i の汚職事件の記事の載った] 新聞はジョン_i が自ら破り捨てた／妻に捨てさせた。

これらの文で「自分」は文頭の位置にある名詞句の中に生じているが、主語の名詞句の指示対象を指すことができるように思われる。(15), (16)が容認されにくいのは事実としても日本語の再帰代名詞の用法にはもともと不明な部分が多い。「は」は本来旧情報を表わすためにその付与された名詞句内に「自分」

が生じている場合には、その指示物をどうしても先行文脈に求めやすい。そうした非統語的な要因がこうした現象には絡んでいる可能性がある。(15), (16)の事実を根拠に主題句の移動の可能性を議論するのは困難であるように思われる。

ところで、Hojiは後置詞句に付いた「は」は対比を表わし、対比文の派生は移動によると考えているので、(35), (36)は(14)のようなかき混ぜ文と全く同じ取り扱いが可能であると反論されるかも知れない。同じように、(38)－(40)や(41)－(43)についても反例とは見なされないかも知れない。しかし、筆者の判断ではこれらの文に関して主題と対比の違いによる容認可能性の差は感じられない。この問題についてはまた後で触れる。

以上から分かるように、目的語の名詞句の主語を越える移動の可能性を探るのにHojiが用いている変項束縛、照応形束縛によるテストが果して信頼を置くに足るものかどうか疑わしく、主題の「は」-句は表層でその生じている位置に直接生成され、対比の「は」-句は移動によってその位置に移されるというHojiの主張は支持し難いように思われる。

(II) 後置詞句の主題化はすべて移動によるのか。

Saitoは名詞句の主題化は下接条件に従わず、再述代名詞の生起を許すが、後置詞句の主題化は下接条件に従い、再述代名詞の生起を許さないと述べ、後置詞の主題化がかき混ぜ(移動)のサブケースであると主張している。Hojiも同様の立場を採っている。しかし、再述代名詞の生起を許さないことが、後置詞の主題化が移動変形であることを示す証拠となるかどうかは明らかでないように思われる。

(10)の例文をもう一度見てみよう。(I)の問題について論じた際に述べたように名詞句の主題文では「は」が直接名詞句に付与されるためにそれだけでは後続の動詞との文法関係・意味関係が明確でない。そこで関係節に於いて対応する代名詞に付けられた助詞がそうした関係を明示するわけである。それが再述代名詞の機能と言ってよいであろう。それに対して、後置詞句の主題化や所

謂かき混ぜの場合には主題句あるいはかき混ぜを受けた句に既に文法関係や意味関係を明示する助詞が付与されているので後続の部分に於いてこれを繰り返すのは冗長である。それが名詞句に「は」の付いた主題文の場合に再述代名詞の生起が許され、かき混ぜ文や後置詞句の主題文ではその生起が許されない理由であるように思われる。

では、後置詞句の主題化が下接の条件に従うという点についてはどうか。主題句の認可 (licensing) の問題に触れて、Saito は文頭に基底部で生成された主題句は後続部との “aboutness” 関係によって認可されるが、「後置詞句-は」この関係を満足するのが難しく、それが「後置詞句-は」が「名詞句-は」と異なる振舞いを示す理由であろうと述べている。もしこれが正しければ（実際正しいと思うが）、後置詞句の主題化が下接の条件に従うという事実はこの主題化が移動によるものであることを示す証拠にはなり難い。「後置詞句-は」が “aboutness” 関係に関する条件を満足できなくて文頭に直接生成されにくいのであるから、文頭に生じ、下接の条件を破っているように見える「後置詞句-は」の例文は、実は、下接の条件の違反とかかわりなく既に容認されにくいのである。

しかし、注意すべきは、こうした主題句の出現に関する認可の条件は「後置詞句-は」の文頭での生起の可能性を全く否定しているわけではないことである。つまり、理論的には「後置詞句-は」が文頭に直接生成され、“aboutness” 関係を満足する可能性もあるというわけである。事実、それを裏付けるデータが多く存在する。まず、次の例文を見てみよう。

- (44) a. (その会には広島や大阪から多くの人が参加していたが) 福岡からはその会への参加者が少なかった。
 b. ?*福岡からその会への参加者が少なかった。
 c. (各県の中で) 福岡からがその会への参加者が (一番) 少なかった。
- (45) a. ラスベガスへは旅行希望者が少なかった。
 b. ?*ラスベガスへ旅行希望者が少なかった。

- c. (アメリカに観光地は色々あるが) ラスベガスへが旅行希望者が一番多いようです。

(44) a, (45) a では文頭に生起した後置詞句に「は」が付いているが容認可能な文である。これらの文は, (44) b, (45) b の容認可能性の低さから判断して, 後置詞句(「福岡から」, 「ラスベガスへ」) が文頭に移動されて派生したものは考えられない。しかし, (44) c, (45) c が容認可能であることから明らかなように(a)文では「は」の「が」との交替が可能である。また, (46)に見られるように(a)文から対応する関係節文が派生され得る。

- (46) a. その会への参加者が少なかった福岡。
b. 旅行希望者が一番多かったラスベガス。

したがって, (44) a, (45) a は Kuroda の挙げた(ii)のタイプの主題文に属すと判断される。Kuroda の分析では, これらの文はそれぞれ主題句が対応する多重主語文の大主語の位置から S' の直接支配下に移動されて派生されることになる。しかし, ここで注意すべきはその基底形で大主語の位置に生じている要素が後置詞句であるということである。(44) a, (45) a が容認可能であるという事実は後置詞句が基底部で直接生成されなければならないこと, そして, それとその後続部との間に“aboutness”関係が成立し得ることを示している。

次に(47) - (49)を見てみよう。

- (47) a. (今度の会には東京からも大阪からも大勢の参加者が来ていたようだが) 福岡からは [その会に参加した人] が一人もいなかった。
b. ?福岡からは太郎が[その会に参加した人が一人もいなかったと] 言った。
c. (?)?その会に福岡からは [参加した人] が一人もいなかった。
d. 福岡からが [その会に参加した人] が一番多かった。

- (48) (試験問題は全部で5つだった。1から4までの問題は全員が正解だったが)

- a. 最後の問題には [正確に答えた人] がいなかった。
- b. ??正確に最後の問題には [答えた人] がいなかった。
- c. *最後の問題にが [正確に答えた人] がいなかった。

(49) (MIT や U/Mass のことまでは分からないが)

- a. ハーバードには [バイクで行った人] がいなかった。
- b. (?)?バイクでハーバードには [行った人] がいなかった。
- c. *ハーバードにが [バイクで行った人] がいなかった。

(a)文はいずれも容認可能である。(47) bも「太郎が」と後続の部分との間に少しポーズを置けば、容認可能度は高い。それに対して、(47) c, (48) b, (49) bに見られるように関係節の動詞を修飾する副詞句を主題句の左側に移すと文の容認可能度が低下する。この事実は主題句が関係節の外に生起していることを示しているように思われる。これまでの研究から日本語の移動変形も下接の条件に従うのは明らかであるので、(47) - (49)の(a)文に於いて関係節の外にある主題句がその中から抽出されたものと考えすることはできない。

ところで、(47) aは「は」を「が」に置き換えても(47) dに見られるように容認可能な文が得られる。したがって、この文は(44) a, (45) aと同じ方法で派生できる。それに対して、(48) a, (49) aは(48) c, (49) cが非文であることから分かるようにその基底形として対応する多重主語文のそれを想定できない。こうした事実は Saito や Kuroda 等の主張に反して「後置詞句-は」が基底部でその表層の位置に直接生成されなければならないことを示している。

ちなみに、非常に興味深いのはこのように後置詞句の主題化が下接の条件に従わないように見える場合に於いても再述代名詞の生起は許されないことである。(50)を参照。この事実は再述代名詞の生起可能性に関して先に示した筆者の説明が正しいことを示しているように思われる。

- (50) a. *福岡からはそこからその会に参加した人が一人もいなかった。
- b. *その問題には正確にそれに答えた人がいなかった。
- c. *ハーバードにはそこに車で来る人がいなかった。

(Ⅲ) 主題の「は」と対比の「は」は統語的に異なる取り扱いが必要か。

Hoji (1985) では主題の「は」と対比の「は」が全く統語的に異なった取り扱いを受けているが、果してその必要があるのだろうか。多くの場合、主題と対比の違いは多分に文脈的である。次の文を見てみよう。

- (51) 夏はビールがうまいが、冬は日本酒がうまい。
 (52) 象は鼻が長いが、キリンは首が長い。

これらの文では「は」-句は対比を表わす。これから分かるように Hoji の主張するように文に基底部で直接生成されると考えられている名詞句がすべて主題を表わすとは限らない。

もっとも、Hoji は、これらの文の「は」-句は対応する多重主語文の大主語の名詞句 ([X が [Y が.....]] の「X が」) の位置に生じていると主張するであろう。Hoji の分析では対比の「は」-句は、主題の「は」-句と違って、下接の条件に従うが、一見それに従わないように見える対比文には対応する多重主語文が存在し、「は」-句は大主語の「が」-句の位置に生成されると考えられている。(53)–(55)を参照されたい。

- (53) ?? (この帽子じゃなくて) その帽子_i は [_s ジョンが [NP [_s e_j t_i かぶっていた] 人_j] をよく知っている] (「は」=対比)
 (54) ??その帽子_i が[_s ジョンが [NP [_s e_j e_i かぶっていた] 人_j] をよく知っている] (多重主語文)
 (55) a. その帽子_i は [_s ジョンが [NP [_s e_j e_i かぶっていた] 人_j] をよく知っている] (「は」=主題)
 b. *その帽子_i を [_s ジョンが [NP [_s e_j t_i かぶっていた] 人_j] をよく知っている] (かきませ文)

この分析に従うと(51), (52)はそれぞれ次の(56), (57)と同じ構造を有することになる。

(56) 夏がビールがうまいが、冬が日本酒がうまい。

(57) 象が鼻が長いが、キリンが首が長い。

Hoji の分析は項に束縛されていないように見える主題句が対応する多重主語文の大主語名詞句の位置からの移動によって派生されるとした Kuroda (1987) の提案と類似している。しかし、Kuroda が主題と対比を統語的に区別して扱っていないのに対し、Hoji は、「は」-句が主題と解釈されるか対比と解釈されるかで全く異なる統語分析を与えている。問題は本当にそれを裏付けるだけの根拠があるかということである。

柴谷 (1978) は「は」の意味・用法に関して、三上章の見解に基づき、「X は」が弱声的に発せられる時は普通の題目的用法であるが、強声的に発せられると、それは他の何かとの対比を示す題目であり、「Xは……(が、Yは……)」という意味合いを表わす」と述べている。そして、彼は「弱声」と「強声」が連続的なものであって、境界がないのと同様に、主題(彼の言う題目)と対比の「は」との間に明確な線を引くことができないケースが多いことを指摘している。

実際、例文の容認可能性の判断も極めて微妙であるように思われる。前述したように、Hoji は「は」が主題を表わすか対比を表わすかで(14) - (16)の容認可能性に違いがあると判断しているが、筆者にはそうした違いは殆ど感じられない。同じことは(53)と(55) aについても言える。筆者にはむしろ(53)の方が容認可能性が高いようにすら感じられる。筆者と同じ判断を示す日本語話者は多い。

更にHojiにとって厄介なデータが存在する。次の(58) aの文を見てみよう。(58) bは(58) aのS-構造を示している。

(58) a. (他の指輪はともかく) 銀座で買った指輪は誰もが鑑定した人の証明書を手に入れたがっている。

b. [NP [S e_i [VP 銀座で e_j 買った]] 指輪_j]_k は [S 誰も_i が [UP [NP [NP [S e_l [UP e_k 鑑定した]]]]]]] の証明書]

を手に入れたがっている]]

(58) a に於いて「は」-句は対比を表わしているが、この文は容認可能度が高い。この文では文頭の関係節に含まれる e_i と主節の主語の数量詞句「誰もが」との間に変項束縛の関係が成立しているにもかかわらず、下接の条件に従っていないように見える。上でみたように Hoji はこのような対比の「は」-句は対応する多重主語文の大主語の位置に生成されると仮定するが、(58) a はその対応する多重主語文そのものの容認可能度が低い。

(59)?*銀座で買った指輪が誰もが鑑定した人の証明書を手に入れたがっている

(58) a が容認可能であるという事実は主題あるいは対比の違いにかかわらず「は」-句が直接文頭に生成されなければならないことがあることを示している。序でながら、(58) a は主題文の派生は移動によるとする Kuroda の分析に対する今一つの反例でもある。

また、後置詞句に付与された「は」が対比を表わすという Hoji の観察についても問題がある。確かに、彼が主張するように、「後置詞句-は」は対比を表わす傾向がある。しかし、いつもそうとは限らない。次に示す例文では「～に」に「は」が付与され、しかも、前置されているけれどもこの「は」は単に主題を表わしているに過ぎない。

(60) いつも講義が終了するやいなやチョムスキーのオフィスには大勢の学生が詰めかけた。

ところで、主題の「は」と対比の「は」の顕著な用法上の違いとして主題の「は」は既知の情報を表わす要素にしか付かないが、対比の「は」にはそうした制約がないことがよく指摘される。この事実を根拠として「は」の二つの異なる用法に対応した統語的取り扱いの必要性を主張する研究者もいる。しかし、両者を統語的に区別して扱う必要はないように思われる。北原 (1981) が指摘

しているように「は」の本務は「取り立て」であり、「は」に見られる用法上の違いは単に取り立て方の違いに過ぎない。北原によると、不特定多数のものの中から他の取り立てられないものを問題にしないで絶対的に取り立てるのが主題の「は」で、有限特定のものの集合の中から他の取り立てられないものに支えられて相対的に取り立てるのが対比の「は」とのことである。

この考えに従うと先に挙げた主題の「は」と対比の「は」の違いが簡単に説明できる。主題は不特定のものの中からまわりのものの助けを借りずにそれだけで取り立てられるのであるから、主題となり得るものは既知の情報でなければならない。それに対して、対比の場合には、取り立てられた要素が取り立てられない他の要素と共に全体で談話の主題となっているので、その取り立てられた要素自体は未知の情報であっても構わない。このように対比の「は」が未知の情報を表わす要素に付き得るのはあくまでもその取り立てられた要素が取り立てられないで残された他の要素と共に談話の主題になっているからであって、どんな場合にも無条件で未知の情報を表わす要素に付与されるわけではない。(61)から分かるように「は」は疑問代名詞には付与されない。

(61) *誰は *何は *いつは *どこは

(61)は「は」が対比の意味に解釈されたとしても容認されない(「は」が対比を意味する場合はこれらの表現が容認可能と判断する研究者もいるが、筆者を含め殆ど話者はそれに対しては否定的な判断を示す)。これは対比の「は」が未知の情報を表わす要素にも付与され得ることから見るとおかしなことである。なぜなら疑問代名詞は未知の情報を表わす最たるものだからである。しかし、このように対比の「は」が疑問代名詞に付与され得ないという事実はこの種の代名詞がその性質上談話の主題になれないことを考えると適切な説明が可能である。対比の「は」もやはり主題的なのである。

どうやら主題と対比の違いを統語的な扱いに反映させなければならないことを示すだけの根拠はなさそうである。

3. 結論・残された問題

前節での議論から主題文の派生について次の結論が得られる。

- ①文頭に生じている目的語の主題句が移動によっては派生され得ないことを示す確実な証拠はない。従って、現状では Saito (1985, 1987) の言うように、主題句は文頭に直接生成され得るし、文中の位置から移動によってその位置に前置されて派生される可能性もあるという立場を採らざるを得ないであろう。
- ②後置詞句に「は」の付与された形式が主題になりにくいのは専ら意味的な理由によるものである。Saito の主張に反して後置詞句も文頭に直接生成される必要がある。これは、Kuroda (1987) の主張するようにすべての主題文を移動によって派生することはできないことを意味している。
- ③「は」が主題を表わすか対比を表わすかは状況によって決まる。Hoji (1985) のように統語的に両者を区別する必要はない。

主題文の派生についてはこの他にも検討しなければならない問題は多い。例えば、「は」はどのように付与されるのか。格助詞に比べて係助詞の付与の問題は等閑視されているが、Kuroda (1965) や久野の一連の研究で示されているように句構造規則でこれを導入するのかそれともそれと違った付与の仕組みを考えるのか。この問題を論じる場合には他の係助詞、とりわけ、「しか」との類似性を考慮に入れる必要がある。また、動詞句の中に主題句が（複数個）生じることができるが、これをどの様に取り扱うのかという問題もある。とりわけ興味深いのは主題句の認可の問題である。基底部で直接生成される主題句は Saito の指摘するように“aboutness” 関係に関する条件によってその出現が認可されなければならない。特に基底部で文頭に直接生成される後置詞句を含む主題文や下接の条件に従わないように見える主題文をも取り扱えるように“aboutness” 関係を構成する要因を解明する必要があるであろう。しかし、こうした問題については稿を改めて論じたい。

参 考 文 献

- Hasegawa, N. 1981. *A Lexical Interpretive Theory with Emphasis on the Role of Subject*, Ph.D. Dissertation, University of Washington.
- Hoji, H. 1985. *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*, Ph.D. Dissertation, University of Washington.
- 1987. Weak Crossover and Japanese Phrase Structure. *Issues in Japanese Linguistics*, ed. by T. Imai and M. Saito, 163-201, Foris.
- 井上和子 1976. 「変形文法と日本語」(上・下) 東京:大修館書店
- 1979. 古い情報・新しい情報 『言語』8巻10号 22-34.
- 1980. 格助詞をめぐる 『言語』9巻2号 20-30.
- Kawashima, M. 1989. Toward the Dual Analysis of Japanese 'wa.' *Mita Working Papers in Psycholinguistics*, ed. by Y. Otsu, 57-67.
- Kiss, K. 1981. On the Japanese 'Double Subject' Construction. *The Linguistic Review* 1, 155-170.
- Kitagawa, C. 1982. Topic Constructions in Japanese. *Lingua* 57, 175-214, North-Holland Publishing Company.
- 北原保雄 1981. 『日本語の文法』(日本語の世界6) 東京:中央公論社
- 1984. 『日本語文法の焦点』 東京:教育出版
- 許斐慧二 1989. 「しか～ない」構文の構造 『英語学の視点』369-392. 九州大学出版会
- Kuno, S. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 久野 暉 1973. 『日本文法研究』 東京:大修館書店
- 1983. 『新日本文法研究』 東京:大修館書店
- Kuroda, S. -Y. 1965. *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Ph.D. Dissertation, MIT.
- 1978. Case Marking, Canonical Sentence Patterns, and Counter Equi in Japanese. *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, ed. by J. Hinds and I. Howard, 30-51, Kaitakusha.
- 1987. Movement of Noun Phrases in Japanese. *Issues in Japanese Linguistics*, ed. by T. Imai and M. Saito, 230-271, Foris.
- Manaster-Ramer, A. 1977. Complex NP Constraint Holds in Japanese. *CLS Book of Squibs with Cumulative Index 1968-1977*, ed. by S. E. Fox, W. A. Beach and S. Philosph.
- McCawley, J. 1976. Relativization. *Syntax and Semantics* 5, ed. by M. Shibatani, 371-419, New York: Academic Press.
- McGloin, M. H. 1987. The Role of Wa in Negation. *Perspectives on Topicalization: The Case of Japanese 'WA'*. John Benjamins.

- 三上 章 1959. 『現代語法序説』 東京：くろしお出版
—— 1960. 『象は鼻が長い』 東京：くろしお出版
奥津敬一郎, 沼田善子, 杉本武 1986. 『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社
Saito, M. 1983. Case and Government in Japanese. *WCCFL* 2, 247-259, Stanford University.
—— 1985. *Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Implications*, PhD. Dissertation, MIT.
—— 1987. Three Notes on Syntactic Movement in Japanese. *Issues in Japanese Linguistics*, ed. by T. Imai and M. Saito, 301-350, Foris.
柴谷方良 1978. 『日本語の分析』 東京：大修館書店

*本稿は平成元年10月4日に慶応義塾大学で開かれた「言語学コロキウム」に於いて口頭発表した原稿に大幅な修正を施したものである。お招きいただいた同大学言語文化研究所の西山佑司教授と大津由紀雄助教授並びに質問・コメントを下された方々にお礼申し上げます。